

視野が広がる海外研修

札幌医科大学附属病院 原田 耕平

2013年7月21日～7月28日まで、スタンフォード大学にて行われた海外研修派遣事業に参加してきた。研修内容は各モダリティ(CT, MRI, PET-CT, PET-MR, 分子イメージング, 画像処理)における講義の他、アメリカの診療放射線技師制度や起業し成功した方たちの講義、さらに工場見学、病院や動物実験施設見学も研修内容に組み込まれており、大変充実した内容であった。宿舎では夜のディスカッションが連日行われ、有意義な1週間を過ごしたのでその内容を簡単ではあるが報告する。

1. 本研修に期待した事とその成果

私がこの研修に期待していたのは、普段あまり携わることのないモダリティの最新情報と、まだ臨床応用されていない先端技術を実際に目で見ること、さらに英語の環境を経験することであった。最もインパクトがあった内容は Molecular imaging である。とくに幹細胞移植による骨折の修復過程の画像化は興味深かった。私にとっての最大の難関は英語であった。初海外ということもあり少しでも英語に慣れるよう努めようと思った。この研修の総責任者でもある Dr.Moseley の英語はとても聞き取りやすかった。研修後の僅かな空き時間を利用して Palo Alto の街を一人で散策し、店員とコミュニケーションをとるよう努めた。私にとって本研修に期待した事への成果は十分に得られたが、予想外に成果を上げたこともたくさんあった。

2. 日米の診療放射線技師の違い

スタンフォード大学病院で実際に働いている診療放射線技師から、制度の違いについての講義があった。アメリカの放射線技師は、まず我々と同じように学校へ行き、最終的に国家試験を受けるのは一緒だが、そこで得られる資格は一般撮影系のみであり、これだけでは CT, MRI, 核医学等の検査を行うことはできない。CT を撮影することができる資格を持つには、さらに 240 時間の学科をとり、試験をパスしなければならない。他 MRI 等の資格も同様であり、CT とは別に学科・試験を受けなければならない。また、病院見学にてアメリカの放射線技師は造影剤を注入するための穿刺が認められていることを知った。これが日米の診療放射線技師の違いであるが、CT における撮影条件の詳細や MRI の撮像ラインの決定に関しては大雑把であり、検査に対する「執着」に関しては、日本の放射線技師が高い水準にあるのでは? と感じた。

3. 診療放射線技師の国際的視野

現在、RSNA や ECR 等の国際学会で演題が採択され、発表している日本の診療放射線技師が散見される。私もアメリカのトップレベルにあるスタンフォード大学で研修をうけ、最新の技術を学んだが、分野によっては日本の技術の方が高い水準にあるものも多いのではないかと感じた。同時に日本の診療放射線技師が行っている研究レベルも高い水準にあると思われる。それらの研究成果を国内のみに留めておくのは非常に勿体なく、海外発信して、最終的に英語論文化することこそが今の我々に求められていると考える。しかし、そういう視野に立つことは難しく、「百聞は一見にしかず」なので、そのきっかけとしてこのスタンフォード大学研修は非常に意義があると思われる。今後も継続していくことで少しでも多くの診療放射線技師が外に目を向けていくようになると考える。

4. 本研修での経験を今後の活動にどのように活かすか

今回の研修で「世界は思ったより身近にある」ことを学んだ。まずは英語力を持つことは必至であり、この経験を活かし国際学会への挑戦、さらには論文を通して世界に自分の研究成果や技術を発信していきたいと思う。

最後に、素晴らしいプログラムを作成していただいた、スタンフォード大学の先生方、GEHC-J のスタッフ、一週間お付き合い下さった松浦様、そして引率し皆を引っ張っていただいた佐藤様に感謝いたします。



本研修の総責任者である Dr.モズレーと
ルーカスセンター(本研修場所)前にて